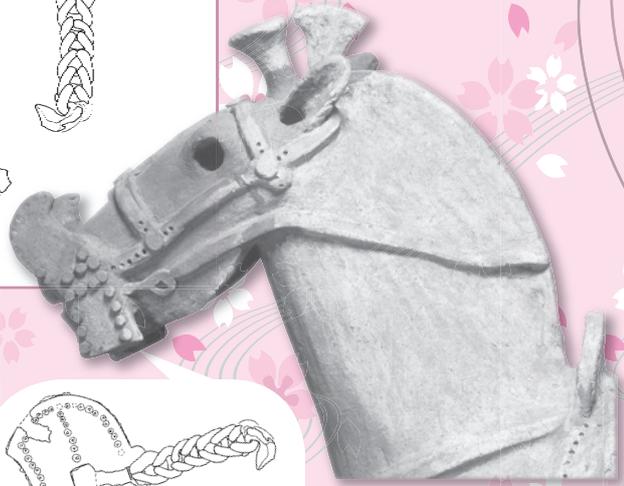
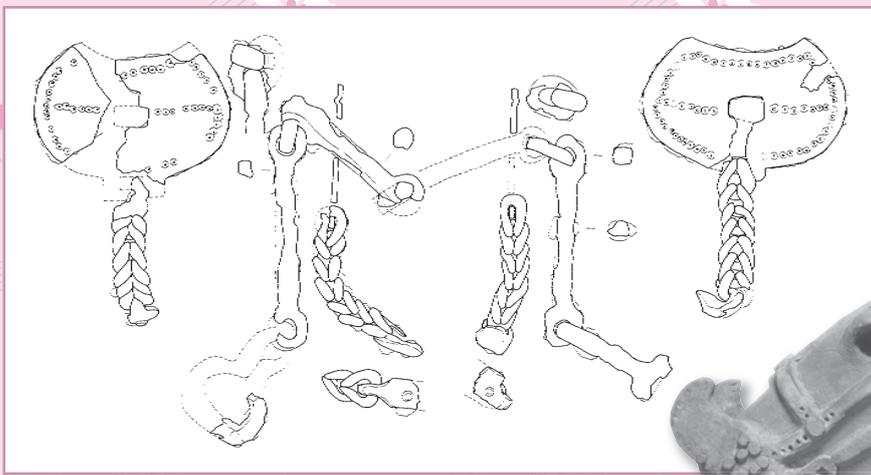
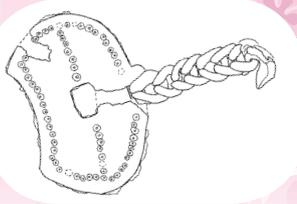


## 高崎山2号墳出土の古墳時代の馬具



馬埴輪 伝常名出土



鉄製楕円形鏡板付轡 高崎山2号墳出土

▲この図は上から見た図になっています。中央の「く」の字に連結した2本の棒の部分がハミで、左右にある鎖のついている部分が鏡板です。なお鏡板は上からでは形がわかりにくいので、両端に平面図がついています。

▶楕円形鏡板（部分）

馬埴輪を見ると装着方法がわかります。

皆さんは「馬」を近くで見たことがありますか？時代劇などのテレビや映画ではよく見かける馬も、現在私たちが実物を見るのは、競馬場や乗馬クラブ、動物園のポニーくらいしかありません。しかし馬は乗り物のほか、物資の運搬や畑の耕作など、近代化以前は人々の生活に欠かせない身近な生き物でした。

ところで、馬はいつごろから人々の生活にかかわってきたのでしょうか。古生物学的には馬は約5500万年前に出現し、現在のような形になったのは今から約1万年前のことと考えられています。もちろん初めは野生馬であり、ヨーロッパの旧石器時代の洞窟遺跡には馬の壁画も描かれています。ただし日本では縄文時代の貝塚から馬の骨は出土しないので、古墳時代前期の4世紀ごろに朝鮮半島から運び込まれ、その後5〜6世紀に全国に普及したようです。ただし、この時代の馬は現在のサラブレッドのように体高が150cmもある大型のものではなく、二回りくらい小さな120cmくらいのものでした。

さて、今回紹介するのは、小高の高崎山2号墳で発見された鉄製の轡です。轡は馬の口に銜える棒状の部分と付属品から構成され、手綱と結んで馬をコントロールする道具です。轡は馬に乗るうえで非常に基本的かつ重要な道具であることから、出現は人が座る鞍や足を載せる銜よりも古く、約6000年前

のウクライナの遺跡に出土例があり、その後、西アジアにおいて発達しました。

現在日本で確認されている最古の轡は、九州北部で出土している4世紀末〜5世紀初頭ごろのもので、高崎山2号墳から出土した轡は、馬が銜えるハミの部分の両側にある鏡板という部品が少し湾曲した楕円形をしていることから「鉄製楕円形鏡板付轡」と呼ばれる形式のもので、この形式の轡は5世紀の終わりごろに朝鮮半島から持ち込まれた鉄地金銅張の製品を原型として日本で製作したと考えられるもので、5世紀末から6世紀前半ごろに流行しました。県内では日立市西大塚1号墳や筑西市上野古墳でも出土していますが、高崎山2号墳のものは鏡板に兵庫鎖が付いているので、6世紀前半ごろの製品と考えられます。

古墳時代の馬具は実用品であるとともに、権威を示す道具としての一面もあります。この楕円形鏡板付轡は大和政権が地域の豪族に配布したものと考えられますが、出土した古墳から見ると、地方のトップクラスの豪族にはなく、セカンドクラスの豪族に配布することが多かったようです。この時期は雄略朝から継体朝への過渡期でもあることから、これらの馬具の入手については、国家的な動向が関係していたとする見方もあります。

この轡は、3月22日(土)〜5月18日(日)まで、上高津貝塚ふるさと歴史の広場第13回企画展「高崎山2号墳と桜川流域の後期古墳」で展示します。小さな鉄の馬具の破片から、古代のロマンをのぞいてみませんか。

☎上高津貝塚ふるさと歴史の広場 ☎826・7111

